

『変奏・バベットの晩餐会』

(アイザック・ディナーセン『バベットの晩餐会』より)

作・高見亮子

【登場人物】

バベット

マチーネ

フィリップ

ノーラ

ソフィーエ

エツラ

マーヤ

レーア

サーヤ

オリーヴィア

ロレンス

【演出ノート】

信心深く質素な町が舞台。

セットは置かず、可動式の椅子、ベンチ、テーブルと若干の小道具のみとし、
舞台転換は、俳優たちが行う。

衣裳は白のみとし、セット、小道具も「色」は用いず、

バベットの晩餐会シーンにて初めて「色」を登場させる。

バベットは異国・フランスからやってきたため、言葉が通じにくい。そのことを
表現するために、バベットは山形弁か福島弁などを用いることが望ましい。

ロパリからの手紙

嵐。家路を急ぐ町の人々。バベット登場。

姉妹の室内（テーブルと椅子2脚）が立ち現われる。

姉妹、手紙を読んでいる。

バベットは、姉妹の側に疲れはてやつれはてて立っている。

ナレーション（以下、N）／おふたりは、まだわたくしのことを覚えておられますでしょうか。ああ、おふたりのことを思い起こすと、わたくしの心は鈴蘭の花で満たされるのです。（*）わたくしが献身的な情熱を捧げたかつてのあの思い出が、あなたがたの心を動かして、ひとりのフランス女の命を救ってはくださらないでしょうか。（**）

フィリップ／（右の*で）ムッシュユ・パンパからね。

マチーヌ／（右の**で）フランス人よ。

フィリップ／ええ。：「このお手紙をおふたりのお手元に届けます不幸な女性、マダム・バベット・エルサンは、パリから亡命しなくてはなりませんでした。内戦。あのおそろしい戦いがパリの通りで荒れ狂い、フランス人の手がフランス人の血を流してきたのです。」

マチーヌ／パリでは革命が起きて、労働者階級の市民たちが一度は政権を取ったんですって。でも3カ月もしないうちに政府軍に奪い返されて。その上、1万人くらいが銃で撃ち殺されたそうよ。

フィリップ／処刑？

マチーヌ／ええ。船乗りのアイヴィンが言ってたわ。おそろしいわね。

フィリップ／「マダム・バベット・エルサンのご主人とご子息は、おふたりとも腕のいい美容師でしたが、」

マチーヌ／へえー

フィリップ／「鼠のように撃ち殺されてしまったのです。」

姉妹／（息をのむ。など）

マチーヌ／鼠のようになって…どうしてフランス人でこういう例えを使うのかしら。

フィリップ／マチーヌ。家族を殺された本人の前よ。

マチーヌ／だって、ほかの例えがあるでしょう。

フィリップ／マチーヌ。……この方も、革命に参加したのね。

マチーヌ／ええ、そうね。

フィリップ／政府軍を一人くらい殺したのかしら。

マチーヌ／貴族の屋敷に火をつける、くらいのことのはしたかもしれないわね。

フィリップ／そうね。

マチーヌ／（黙読を進めており）この方を家政婦として雇ってくれと書いてあるわ。

フィリップ／え。ここで？（黙読を急ぐ）

マチーヌ／…フィリップ。

フィリップ／なあに。

マチーヌ／私たち、彼女を雇うのは無理だわ。

フィリップ／ええ。（ため息）どうしましょう。

マチーヌ／でも、伝えないとね。

フィリップ／ええ。

マチーヌ／…（呼びかけようとして）お名前はなんていったかしら。

フィリップ／（手紙を確認して）バベットよ、お姉さん。

マチーヌ／バベット。

バベット／はい。

マチーヌ／遠いところからはるばるいらしていただいたあなたに、申し上げにくいんだけど…言えないわ。

フィリップ／私たちは、あなたを雇ってさしあげたくても、残念ながら

それだけの余裕がないんです。わかるかしら。お給金が払えないの。

バベット／（なるべく標準語から離れた方言で。※以下、同じ）私は何も要りません。こちらに置いていただけるだけでいいんです。

マチーヌ／フィリップ／…ええ？

バベット／お給金のことですよ？ 私は何も要らないんです。私は、

ただここでムッシュ・パパンが紹介してくださった良い人々にお仕えしたいだけなんです。ほかに働くつもりもありません。

フィリップ／…「ムッシュ・パパン」以外は何も聞き取れなかったわ、フランス訛りが強すぎて。

マチーヌ／（咳払い）今のはフランス語よ、フィリップ。

バベット／フィリップ。（※名前を確認）

フィリップ／はい!?

バベット／マチーナ?

マチーナ／ヌ。マチーナ。

バベット／マチーナ。

マチーナ／そう。

フィリップ／私、ソフィーエを呼んでくるわ。

マチーナ／え? どうして? 今?

フィリップ／彼女、少しだけフランス語ができるのよ。(退場)

マチーナ／ねえ。一人で行くの? こんな嵐の中を?

フィリップ／(声のみ) すぐに戻るわ。

マチーナ／…ソフィーエの家はすぐそこなの。…このお手紙、最後に楽

譜が書いてあるわ、二小節だけ。…ムツシュ・パパンは有名なオペラ

歌手なんですってね。

バベット／はい。

マチーナ／何年も前に、この町に滞在してらしたことがあって、そのと

きに、今の妹のフィリップに歌のレッスンをしてくださったのよ。

バベット／はい。

マチーナ／あ…知ってるのね。…この楽譜…【左の二小節を歌う】



…ムツシュ・パパンが作曲したのかしら。

バベット／モーツアルト。

マチーナ／ああ、もーっあ…あなた、私たちの国の言葉が、わかるの?

バベット／半分くらい。

マチーナ／そう。よかったわ。…【右の二小節を歌う】

別空間 (& 数日後) にソフィーエとノーラ。

ソフィーエ／【右の二小節を歌う】(※実際にフィリップが歌っていたように、

ソプラノオペラ歌手のように)

ノーラ／フィリップお嬢さんが、今の歌を?

ソフィーエ／うん。フィリップお嬢さんがあのきれいな声で歌いながら、嵐の中を歩いてこられてね。

ノーラ／え……

ソフィーエ／実はね、お嬢さんたちのところに手紙がきたんだよ。それがきつとムツシュ・パンからで、フィリップお嬢さんはムツシュ・パンを思い出して

ノーラ／ソフィーエ。

ソフィーエ／なに？

ノーラ／フィリップお嬢さんが嵐の中で無意識に恋の歌を歌ってた話は、二度と口にしちゃいけないよ。

ソフィーエ／そりゃあ、わかってるよ。誰にも言わない。

ノーラ／ソフィーエ。あんたは歌なんて聞かなかったし、私も何も聞かなかった。私たちは今すぐ忘れてしまわないと。

ソフィーエ／ああ。そうだね。

ノーラ／…忘れたかい？

ソフィーエ／忘れたよ。

ノーラ／そうだ、ソフィーエ。話したいことは別にあったんじゃないの？

ソフィーエ／そうだった。マチーヌとフィリップの家に、新しい家政婦がきたんだよ。

ソフィーエとノーラ退場。

元の空間に、マチーヌとフィリップ。※バベットは「」まで退場している。

マチーヌ／ソフィーエが来てくれて助かったわ。

フィリップ／ええ。…マチーヌ。

マチーヌ／なあに。

フィリップ／もう一度ムツシュ・パンからの手紙を読んでもいいかしら。さっきは気が動転していて。読み落としたところがあるかもしれないわ。

マチーヌ／そうしましょう。

テーブルに手紙を広げる。

マチーヌ／「マダム・バベット・エルサンのご主人とご子息は、おふたりとも腕のいい美容師でしたが、鼠のように撃ち殺されてしまったのです。」…

姉妹／（ため息）

ソフィーエ／（声のみ）失礼します。（※その後には登場）

マチーヌ／「バベットは『ペトロレース』（ペトロレースとは、家々に石油をかけて放火して回った女たちにたいしてこちらで使われていることばなのです）としていったん逮捕されたのですが、かろうじて逃れたのです。全てを失った彼女は、もはやフランスにとどまる気はありません。」…

姉妹／（ため息）

ソフィーエ／あほう

フィリップ／ああ。ソフィーエ。ありがとう。助かったわ。

ソフィーエ／おやすみになられたようです。

マチーヌ／そう。あなたには物置部屋の片づけまで手伝っていただいたちやって、悪かったわね。

ソフィーエ／いいえ。…ペトロレース？

姉妹／ん？

ソフィーエ／…じゃあ私は

マチーヌ／そうね。お引き留めして悪かったわ。

ソフィーエ／ありがとうソフィーエ。

マチーヌ／私、ソフィーエをお見送りしてくるわ。

ソフィーエとマチーヌ、退場。フィリップ、手紙を読む。

N／バベットはわたくしを訪ねてきて、自分を雇ってくれる良い人びとをご存じなら紹介してほしいと頼んできました。良い人びと。この美しいことばを聞くと、わたくしの心の聖なる場所に秘められていたあなたがのお姿が臉に浮かんできたのです。わたくしはあなたがたに人間ひとりの命をお渡しいたします。バベットには、料理ができます。

数日後。右ナレーションの間にセットチェンジ。

姉妹の住まいを、遠くから見ても「そこそ噂話をしている町の女たち。

バベットが現われると、サツと何気なく散る。

バベットは、水まき？。あるいは扉や窓の掃除？。やがて退場。

マチーヌとフィリップ登場。教会に向かう道すがら……

マチーヌ／ねえ、フィリップ。

フィリップ／なあに。

マチーヌ／ゆうべは、ついほだされて、雇うことにしてしまったけれど、本当によかったのかしら。

フィリップ／そうなのよ、マチーヌ。パリが今どんなことになっているのかよく知らないけれど、踊り子がいたりするんでしょう？

マチーヌ／ファッションというのものもあるらしいわ。

フィリップ／ファッション？。なあに、それ。

マチーヌ／フランス語ではモードっていうらしいの。

フィリップ／どちらにしてもよくわからないわ、マチーヌ。

マチーヌ／とにかくお金を湯水のように使う国民よ。

フィリップ／ええ。

マチーヌ／ムツシュ・パパンだって悪い人ではなかったけれど、オペラ座のチケットのお値段を聞いたことがある？

フィリップ／いいえ。

マチーヌ／特別席というのがあって、小さなお部屋になってるらしいんだけど、その一部屋のお値段はお父様の一カ月分の年金と同じ金額だったわ。

フィリップ／えっ！…マチーヌ

マチーヌ／そう。今日改めて、私たちの暮らし方についてきちんとお話ししないと。

フィリップ／そうね。でもちゃんと言葉が伝わるかしら。

マチーヌ／そうね。でも、伝えないと。

フィリップ／ねえ。さっきは、台所をあちこちチェックしてたわ。

マチーヌ／それもなのよ、フィリップ、私が心配してるのは。

フィリップ／わかるわ。お手紙には「バベットは料理ができます」って書いてあったけれど…

マチーヌ／フランスでは蛙を食べるっていうじゃない。

フィリップ／…大変な人を雇ってしまったわ。

二人退場。

教会に、町の人々、集まってきて、腰かける。

マーヤ／パリから来たらしいよ。

サーヤ・レーア／へえ。

ノーラ／バベットでしょ？

エツラ／放火を繰り返して逮捕されたことがあるみたい

レーア／…放火を繰り返して逮捕されたらしい

マーヤ・サーヤ／ええ！？

オリーヴィア／パリかあ…なつかしいわ。

ノーラ／オリーヴィアじゃない？

ソフィーエ／…ほんとだ。

オリーヴィア／パリでは私、売れない絵描きと恋に落ちたわ。

一同／……

オリーヴィア／最初は彼のモデルだったの。私だよ。

ソフィーエ／オリーヴィア。ここは教会だから。

オリーヴィア／いいのよ、神様はみんなご存じだもの。

一同／……

オリーヴィア／ソフィーエも、一度はこの町を出ないと。

ソフィーエ／出るっていったって

オリーヴィア／ノーラ。私、あんたには才能があると思ってるのよ。

ノーラ／才能？

オリーヴィア／そう、才能。この町に埋もれてたってもったいないわ。

エツラ／あ。お二人がおみえになった。

オリーヴィア／じゃあ、私は失礼するわ。退屈な時間はごめんだから。

一同／……

オリーヴィア、退場。

マチーヌとフィリップ、登場。

フィリップ／（小声で）今日も少ないわね。

マチーヌ／（咳払い）

フィリップ／おはようございます。

一同／おはようございます。

マチーヌとフィリップが、最前列の、いつもの席に向かう。

マチーヌ／何かあったの？　いつもと空気が違うみたい。

フィリップ／…そうね。

ノーラ／何もありますん。

エツラ／何もありますん。

マチーヌ／そう。じゃあ皆さん。まず、いつもの讃美歌を歌いましょう。

フィリップ／レーア。オルガンをお願い。

レーア、オルガンに向かう。

讃美歌の前奏が流れはじめる。人々、讃美歌を歌う。

姉妹の室内で、オリーヴィアが右の讃美歌をハミングしている。

オリーヴィア／「フィリップさま…それにしてもわたくしが失ったツェルリーナ、雪のように白い、歌う白鳥の君。天国で、わたくしはふたたびあなたの声を聞くことになるでしょう。天国でならあなたも、怖れ臆することもなく、神のみこころとして、お歌いになるでしょう。天国で、あなたは永遠に、偉大な芸術家になるのです。ああ、あなたは天使たちをどれほど魅了することでしょう」

マチーヌとフィリップが、帰ってくる。玄関先で、働いているバベットに…

フィリップ／ただいま、バベット。

バベット／お客様です。

マチーヌ／お客様？

フィリップ／どなたかしら。…（家の中に入りながら）ともかく、お茶をお持ちして。

バベット／はい。

マチーヌ／一番手前にあるお茶の葉っぱをティースプーンに軽く一杯だけ入れて。それで三人分は十分だから。

バベット／…はい。

オリーヴィア／やつと帰ってきたようね。

マチーヌ、フィリップ、室内に登場。

マチーヌ・フィリップ／オリーヴィア！

オリーヴィア／こんにちは。

フィリップ／いつ、こちらへ？

マチーヌ／何年ぶりかしら

オリーヴィア／お互い、見違えたわね（笑）

フィリップ／…あら？ マチーヌ、どうしてここにムッシュ・パパンの

お手紙が？

オリーヴィア／ねえ（※同意）、どうしてかしら。

姉妹／…

マチーヌ／（笑）きつとバベットが掃除の途中で仕舞い忘れたんでしょ
う（手にとり、ポケットか鞆にしまう）

フィリップ／そうね。

オリーヴィア／ムッシュ・パパンにとってフィリップは永遠の恋人なの
ね。ドン・ジョバンニにとつてのツェルリーナのように。

フィリップ／…（咳払い）

マチーヌ／お茶はまだかしら。

オリーヴィア／雪のように白い、歌う白鳥の君。

マチーヌ／今回もフォツソムの伯母様のお屋敷に？

オリーヴィア／ええ。伯母もあんな田舎に隠居して退屈してるものだから、どうして顔を見せにこないんだって、脅迫状が届くのよ。

マチーヌ／まあ。(愛想笑)

バベット、登場。愛想を振る舞っわけでもなくお茶を出す。

マチーヌ／ああ、ありがとう。

フィリップ／こちら、オリーヴィア。フォツソムのお屋敷に住まわれるレーヴェンイエルムさんの奥様の姪御さんなの。オリーヴィアはロンドンに住んでるのよ。

マチーヌ／オリーヴィアの伯母様は、とても信心深い方で私たちの父とも親しくしていて

オリーヴィア／私はそんなには信心深くないの。こんにちは。
バベット／(軽く会釈して退場)

フィリップ／特に愛想がいいわけじゃないんだけど

マチーヌ／とてもよくしてくれているのよ

オリーヴィア／あれが放火女ね

姉妹／え！

オリーヴィア／ペトロレース。

マチーヌ／…ああ。オリーヴィア。ムッシュ・パパンのお手紙をちらっとご覧になったのね。

オリーヴィア／町中の人が噂してるわ。マチーヌとフィリップの家が燃えてしまうんじゃないかって。ここに来るまでに、何人の人から聞いたことか。

フィリップ／まあ、そんな噂が…

マチーヌ／大丈夫よ、フィリップ。誤解はとけるから。

フィリップ／そうね。

マチーヌ／伯母様はお元気？

オリーヴィア／ええ。想像以上に。

マチーヌ／それはよかったわ。

オリーヴィア／どうしてあんなに退屈なのにあんなに元気なのかしら。

マチーヌ・フィリップ／…

オリーヴィア／それでね、伯母から少し話を聞いたんだけど。

マチーヌ・フィリップ／…

マチーヌ／どんなお話を？

オリーヴィア／お二人のお父様がお亡くなりになってから、この町の
人々の信仰心が薄れてきたって。

マチーヌ・フリッパ／……

オリーヴィア／そうなの？

マチーヌ・フリッパ／……

マチーヌ／たしかに、お祈りの集会におみえになる方は少し減ってきた
けれど

フリッパ／仕方がないことだと思ってるのよ、オリーヴィア。私たち
がいくら父の片腕だったといっても、父の代わりはつとまらないから。

オリーヴィア／私はね、いいことじゃないかと思ってるの

マチーヌ／いいこと！？

玄関のノックの音。

フリッパ／誰かきたのかしら。

バベット／（登場して）お客様です。

ノーラ、ソフィーエ（他にも？）が入ってくる。

マチーヌ／まあ、あなたたち。

フリッパ／どうしたの？

ノーラ／お二人にご相談があつて（オリーヴィアに気がつき）あ。…
マチーヌ／なあに？

フリッパ／とにかく、中に入って。

ノーラ／（ソフィーエに）オリーヴィアがいる。

マチーヌ／どうしたの？

ソフィーエ／（ノーラに）私は、いてもかまわないけど。

ノーラ／（ソフィーエに）じゃあ、あんたから。

ソフィーエ／私たちが、サンドスノウボールのチームを持っているのを

お二人はご存じでしょうか。

マチーヌ／え？…ええ。

フィリップ／毎週、教会の前の広場で練習している、あれでしょ？
ソフィーエ／実は、私たちのチームは、ずいぶん強くなったんじゃないかと思うんです。

マチーナ／そう。

フィリップ／毎週よく練習しているものね。すばらしいわ。

ソフィーエ／それで、来週は教会をおやすみして、大会に出たいと思っています。

マチーナ・フィリップ／……

ノーラ／来週かどうかは、まだわからないんじゃない？

ソフィーエ／あ。そうなんです。これから、船乗りのアイヴィンに大会の日程を調べてもらおうんですけど。

エッラ／国内で優勝したら、世界大会にも出てみたいなと思って。

マチーナ・フィリップ／……

ソフィーエ／やっぱり、教会をおやすみしてはまずいでしょうか。

マチーナ／…あのね、ソフィーエ。…

フィリップ／…ソフィーエ。

ソフィーエ／はい。

フィリップ／サンドスノウボール…っていったかしら。

ソフィーエ／はい。

フィリップ／チームを作って、何年になるの？

ソフィーエ／（ノーラと確認して）七年です。

フィリップ／それじゃあずいぶん強くなったでしょうね。

ソフィーエ／はい。でもまだ町の中でしかゲームをしたことがないから、フィリップ／そうなの。サンドスノウボールっていうのはね、この町に

しかないゲームなの。

町人たち／……え。(※口ぐちに)

マチーナ／私たちの父が作りだしたゲームだから。

ソフィーエ／…この町にしかないゲーム…？

フィリップ／ええ。だから、少なくとも来週は、大会はないと思うわ。

マチーナ／それにね、ソフィーエ。大会に出ることになると、みんな、

ユニフォームが欲しくなると思うのよ。

ソフィーエ／ユニフォーム？

マチーヌ／おそろいの体操服よ。色とりどりの。

ソフィーエ／私は別に、そんな色とりどりの体操服はほしくありません。マチーヌ／はじめはそう思っただけでもね、大会で皆さんが着ている色とりどりのユニフォームを目にしたら、きつとほしくなるわ。

オリーヴィア／ちよつとちよつと、待ってちよつと。まさか、そのユニフォームが贅沢だと言ってるんじゃないでしょうね。

マチーヌ／贅沢です。

フィリップ／おそろいの靴もほしくなるかもしれないわ。

ソフィーエ／靴も？

オリーヴィア／靴ぐらいそろえたらいいじゃないの。

フィリップ／ぐらい

マチーヌ／それに、あのゲームのいいところでもあり、欠点でもあるのは、審判が一人しかいないこと。大会になると、きつと欠点になるでしょうね。どうしてだかわかる？ ソフィーエ。

ソフィーエ／…いいえ。

マチーヌ／どのチームも、ひいきしてほしいから、審判にプレゼントをするようになるのよ。

オリーヴィア／マチーヌ

マチーヌ／あなたたちもきつと、鱈の干物やベリーのジャムやニシンの酢づけを抱え込んで船に乗るようになるのよ。それがおかしいことだとも思わずに。

オリーヴィア／ねえ、マチーヌ

マチーヌ／あなたが悪いと言っているのではないのよ。大会そのものが悪いと言っているわけでもないの。そういう世間に、今のあなたたちは流されてしまうんじゃないかと心配してるの。その流れは、誰も舵をとってくれません。

ソフィーエ／わかりました。大会には出ません。

エッラ／大会はないし。

フィリップ／エッラ。あなたは大会に出るためにサンドスノウボールを始めたの？

エッラ／いいえ。

フィリップ／そうよね。

オリーヴィア／ノーラ。あなたも何か相談事があったんじゃない？
ノーラ／ええ、でもまたこんどで…

フィリップ／まあ、どうして？

オリーヴィア／私がいるからかしら。

フィリップ／そんなことないわよね。

ノーラ／…

オリーヴィア／きつとそうなのよ。

マチーヌ／まあまあ、みなさん、さつきから立ちっぱなし。

フィリップ／そうね。

マリーヤ／私たちは帰ります。

フィリップ・マチーヌ／そう？

マリーヤ、レア、サーヤ、室内を退場。

マチーヌ／さあ。じゃあ、あなたたちは座ってちょうだい。（うながし、
自分は戸口へ）バベット！ 皆さんにお茶とフィリップが焼いたビス
ケットをお出しして。

三人、座る。

フィリップ／さあ。ノーラ。

バベット、盆にお茶とビスケットをのせて、登場。お茶を渡して回る。

マチーヌ／ああ、ありがとう。（ビスケットの皿だけ受け取る）

マチーヌ、ビスケットを一つとり、回す。一同、ポリポリ食べる。それぞれに、
「あれ。いつものビスケットと違うな」とわずかな反応。

オリーヴィア／なあに、これ。

マチーヌ／ビスケットよ。

ノーラ／私、ロンドンに行きたいんです。

一同／……

マチーヌ／あら？（ビスケットの味に気がつき）

フィリップ／ロンドン？

ノーラ／はい。

マチーヌ／（フィリップに）あなた、ビスケット食べてみた？

フィリップ／いいえ。（※または、「ええ」）

マチーヌ／粉砂糖がかかっているわ。

フィリップ／マチーヌ。

オリーヴィア／よく決心したわね、ノーラ。

フィリップ／待ってちょうだい。ロンドンで、どこだかわかっているの？

ノーラ／はい。

フィリップ／オリーヴィアが住んでるところよ。

ノーラ／はい。

オリーヴィア／私が住んでたらまずいの？

フィリップ／そういう意味じゃなくて、とっても遠いということをお願いの。

オリーヴィア／遠くもないわ。パリやマドリッドよりずっと近いわよ。

フィリップ／オリーヴィア

オリーヴィア／私はね、みんな一度この町を離れてみたほうがいいと思ってるのよ

マチーヌ／オリーヴィア

オリーヴィア／お祈りをする毎日も、もちろん一つの生き方だけど、世界には神様を信じてない人たちもいるわ。

フィリップ／何を言い出すの

オリーヴィア／例えば、よ。そのぐらいいろいろな人がいる世界を一度は見るべきだと思うのよ。そうしたら、もっと違う人生が

マチーヌ／おっしゃりたいことは、よくわかるわ、オリーヴィア。でも、私たちは、身の丈にあった暮らしを望んでいるんです。ノーラに何を吹き込んだか知らないけれど、背伸びをしても届かない夢を、すぐに手に入るように彼女たちに話さないでほしいの。それからね、バベットのビスケットには粉砂糖をかけないように。わかるかしら。粉砂糖はとても貴重なの。

オリヴィア／ノーラ。あなたの夢を、粉砂糖といっしょくたにされたわ。

フィリップ／ノーラ。あなたが言ってたように、またこんどゆっくりお話を聞くことにするわ。

ノーラ／はい。

オリヴィア／いいえ、ノーラ。今話したほうがいいわ。私がないほうが話しやすいんだったら、そうするから。こちらの放火女は英語はできるのかしら。粉砂糖の件、伝えてあげるわよ。

マチヌ／バベット。オリヴィアをお見送りして。

バベット／はい。

オリヴィア、バベット、退場。

一同／…（少し落ち着く）

マチヌ／ノーラ。オリヴィアにそそのかされたんじゃない？

フィリップ／私たちは、あなたはとももしっかりした人物だと思っているし、信頼もしているのよ。だから、そそのかされたりしないこともわかってるわ。

ノーラ／ありがとうございます。…では、今お話しします。…私、小説家になりたいんです。

マチヌ・フィリップ／……

マチヌ／…そう。

フィリップ／それで、どうしてロンドンに？

ノーラ／船乗りのアイヴィンに、「シャーロック・ホームズ」の本を借りました。ロンドンのお話です。

フィリップ／シャイロック…？

ノーラ／ああいう小説を書いてみたいと思ったんです。でも、この町には事件がありません。だから、題材がないんです。

マチヌ／…フィリップ。私、よく理解できなかったわ。事件がないのはいけないことなの？

ノーラ／いいえ。すばらしいことだと思います。

フィリップ／シャイロックというのは、事件の名前なの？

ノーラ／事件を解決する探偵の名前です。

マチーヌ／ねえ、ノーラ。事件がないのはすばらしいことよね？

ノーラ／はい。

フィリップ／あなたの小説にも、シャイロックのような探偵が出てくるの？

ノーラ／はい。でも…

フィリップ／でも？

ノーラ／フィリップお嬢様。シャイロックではなく、シャーロックです。

フィリップ／ノーラ。

ノーラ／はい。

フィリップ／それは大事なこと？

ノーラ／いいえ。

マチーヌ／そうよ、ノーラ。大事なことはね、どうしてあなたが、すばらしいことを小説に書こうと思わないのかってことよ。

ノーラ／この町のことを？

マチーヌ／ええ。あなたが素晴らしいと思うのなら。

ノーラ／それだと…

フィリップ／それだと？

ノーラ／面白くないんです。

マチーヌ／面白くない——

ノーラ／あ。どういえばいいんでしょう。すばらしいことはわかってい
るんですけど、当たり前すぎて、どきどきしないんです。

マチーヌ／どきどきしない——

フィリップ／とても心配だわ。

マチーヌ／ええ。

フィリップ／あなたに限らず、私たちは、危険な香りに少し惹かれるの
よ。危ない目にあってみたって、どこかで少し思ってるの。

ノーラ／危険な香り…危ない目…

フィリップ／あなたぐらいの年ごろには特にそう。事件の近くにいけば、
事件に巻き込まれるかもしれないわ。でもあなたはきつと、少し巻き
込まれてみたいって思ってるのよ。そうするとね、知らないうちに、
知らないところまで落ちていくかもしれないわ。

ノーラ／…私はただ、誰も解決できないような難しい事件をアツと驚くような推理で

フィリップ／ノーラ。

ノーラ／はい。

フィリップ／もう一度よく考えてみて。あなたは小説を書きたいわけじゃないくて、危ない目にあってみたいんじゃない？

ノーラ／そんなことはありません。

マチーヌ／そうよ、フィリップ。それは言い過ぎだわ。ノーラが可哀相よ。

フィリップ／…そうね。ごめんなさい。たくさん心配が押し寄せてしまつて。

マチーヌ／それよりノーラ。もう一つ、根本的なことを聞いてもいいかしら。

ノーラ／はい…

マチーヌ／ロンドンまでは船乗りのアイヴィンに連れて行ってもらつてとして、ロンドンに着いたら宿はオリーヴィアのところに？

ノーラ／…はい。まだ、オリーヴィアにはお願いしてないんですけど、厚かましすぎるので頼みづらくて。

マチーヌ／生活費はどうするの？

ノーラ／…え…？

マチーヌ・フィリップ／…

フィリップ／あなたは、この町で五本の指に入る鱈釣りの名手だわ。たてなわをサバかせたらノーラの右に出る者はいないって評判だもの。でも、ロンドンでは鱈は釣れないでしょ。

ノーラ／小説が売れば

フィリップ／売れるまでは何を食べて暮らすの？

マチーヌ／そうよ、ノーラ。小説を書くのは時間がかかるでしょう？何カ月もかけて書き上がってから、本になるまでもまた何カ月もかかるんじゃない？

フィリップ／それとも、これまでに書きためた小説があるの？

ノーラ／…

ソフィーエ／ノーラ。

ノーラ／ん？

ソフィーエ／あんた、洗濯物を干したままなんじゃない？ そろそろ取り入れないと。

ノーラ／ああ。そうね。

エツラ／私も洗濯物をそろそろ取り入れないと。

マチーナ／そう。じゃあ、皆さん、また来週。

ソフィーエ・エツラ／はい。

フィリップ／ノーラ。

ノーラ／はい。

フィリップ／鱈を釣る女の小説を書いてみてはどうかしら。

ノーラ／…（うなづく）

一同、適宜、退場。（ノーラとフィリップとマチーナは最後に）

バベット、入れ違いに登場して、テーブルを片つける。

町の人々、すくすくこと帰途についている。

途中にオリーヴィアがいる。

オリーヴィア／ノーラ。どうだった？

ノーラ／…

オリーヴィア／その顔じゃ、まるめこまれたわね。

ノーラ／まるめこまれたわけじゃなくて、私に考えがなさすぎただけ

オリーヴィア／そもそも、どうしてみんな、あの二人に相談するの？

ソフィーエ／どうしてって

ノーラ／子供のころから、お父様にもお二人にもお世話になってるし

ソフィーエ／あの方たちは、嘘をつかないし

ノーラ／いつも本気で私たちのことを心配してくださってます。

オリーヴィア／私も本気で心配してるわよ。

一同／……

エツラ／でも…

オリーヴィア／でも？

エツラ／オリーヴィアの言うことは、ときどき意味がわからない。

オリーヴィア／そうなの？ 例えば何がわからなかったの？ 何でも詳しく話してあげるわよ。

エツラ／……売れない絵描きと恋に落ちたっていうのは何ですか。

ソフィーエ／エツラ

エツラ／ソフィーエは意味わかったの？

ソフィーエ／言われたままなんじゃないの？

エツラ／言われたままって？

ソフィーエ／だから、売れない絵描きと恋に落ちた

エツラ／それは自慢してるの？

ソフィーエ／恋に落ちたところは自慢なんじゃない

エツラ／じゃあ売れない絵描きは何？

オリーヴィア／ノーラ。説明してあげて。(退場)

ノーラ／オリーヴィアにとっては、伯爵と恋に落ちるより、金持ちの商売人と恋に落ちるより、売れない絵描きっていうところが一番自慢なんじゃない？

ソフィーエ・エツラ／どうして？

ノーラ／私たちは、危険な香りに少し惹かれるから。危ない目にあってみたいって、どこかで少し思ってるわけだから。(退場)

ソフィーエ／へえ。

エツラ／売れない絵描きって、危険な香りがするの？

ソフィーエ／そうなんじゃない。

ソフィーエ、エツラ、退場。

別空間に、マチーヌ、フィリップ登場しながら……

ややあつて、バベットも登場。

マチーヌ／オリーヴィアが現われると、自分の心臓の鼓動がいつもの三倍ぐらい大きく聞こえるわ。

フィリップ／でも今回はまだ、落ち着いた服を着ていてくれたからよかったわ……前に現れたときは、真っ赤なドレスになんとかって言う羊の毛皮をまとって

マチーヌ／首にも指にも耳にも宝石をつけていて

フィリップ／マチーヌ。バベットよ。

バベット／お呼びですか。

フィリップ／ええ、バベット。

マチーヌ／粉砂糖のことは、オリーヴィアから聞いたかしら？

バベット／あー(※納得)。OK。

フィリップ／バベット、座ってちょうだい。きちんとお話ししておかなければいけないことがあるの。

マチーヌ／あなたはパリで暮らしてらしたから、贅沢を贅沢とも思わないと思うのね。

フィリップ／マチーヌ。今の表現はわかりにくいわ。

マチーヌ／そうね。

フィリップ／パリには踊り子がいたりするんでしょう？

マチーヌ／オペラ座のチケットもとても高額だと聞いています。

フィリップ／パーティーのようなものが毎日のようにあって、ご馳走を食べて着飾ってダンスを踊って

バベット／(うなずいて、理解したことを伝える)

マチーヌ／でもね、バベット。そういう贅沢な暮らしは、私たちには、必要ありません。

フィリップ／私たちは、本当に必要なものだけに囲まれて、感謝しながら暮らしていきたいと思ってるのよ。

マチーヌ／それ以上のものは、私たちの感謝の気持ちを鈍らせることになると思ってるの。

バベット／…ああ。(なんとなくわかる)

マチーヌ／わかったのかしら。

フィリップ／先を続けましょう。

マチーヌ／私たちのこのテーブルにのる食事は、できる限り質素な一品料理にしてちょうだい。

フィリップ／質素な一品。お皿は一つ。

マチーヌ／もしその一皿が、温かいお料理だったら、私たちはとても幸せだわ。

バベット／ああ。わかりました。

マチーヌ／毎日温かくななくてもかまわないのよ。

フィリップ／ときどきのほうがいいかもしれないわね、マチーヌ。

マチーヌ／そうね。そうすれば、暖かさに感謝できるから。

フィリップ／わかるかしら？

バベット／（うなずいて、理解したことを伝える）

マチーヌ／それから、私たちの一皿よりも大切なのは、この家を訪ねてくる不安を抱えた方たちに出してあげるスープです。

フィリップ／スープはいつも桶いっぱいに用意しておいてね。私たちのためではなくて、

マチーヌ／不安を抱えている方たちのために。

バベット／（理解して、うなずく）

マチーヌ／わかってくれたみたいね。

フィリップ／ええ。安心したわ。

バベット／私は、とても小さいところに、

マチーヌ／え？

フィリップ／とても小さいところに？

バベット／年をとった司教様の厨房で働いたことがあります。

フィリップ／司教…

マチーヌ／様…

バベット／ですから、質素、節約、よくわかります。

フィリップ／マチーヌ／……

マチーヌ／フィリップ。

フィリップ／ええ。私たちは、その司教様に負けないようにしなければ。

バベット／温かい食事も、二日に一回でした。

マチーヌ／私たちはね、バベット。三日に一回にしてちょうだい。

フィリップ／そうね。もっと少なくともいいくらいだけ。

バベット／オーケー。

マチーヌ／じゃあ、私たちは、スープを持ってお見舞いに行ってくるわ。フィリップ／足が悪くなって、この家に歩いてこられない方が何人かいるのよ。

マチーヌ、フィリップ、退場。ややあつて、バベットも退場。

町の女たち、遠まきに、姉妹の家を見ながらひそひそ話。

別空間に、フォツソムのレーヴェンイェルム家の屋敷の一室。

オリーヴィア、登場。

オリーヴィア／ただいま、伯母さま！ もうあの町には二度と行かないわ。伯母さまに借りたこの服も、二度と着ませんから。あの町の人々の信仰心が薄れてきたっていうから、少しは華やいた雰囲気になってるのかしらって楽しみにのぞきに行ったのよ。とんでもない。十年前より地味になってたわ。十年前に遊びに行ったときは、まだ、若い子たちの目が好奇心にあふれてキラキラしてたんだけど…

ロレンス／（登場し）伯母さまはおやすみになりましたよ。

オリーヴィア／ロレンス！

ロレンス／お久しぶり。

オリーヴィア／あなたも、伯母さまから脅迫状が届いたのね。

ロレンス／脅迫状？ はは。あいかかわらず、伯母さまがこわいんですね。

オリーヴィア／こわい？ ああ、今気がついたわ。そうなのかも。

ロレンス／そのお召し物も、伯母さまの言いつけに従ったようですね。

オリーヴィア／そうなのよ。十年前にドレスを着てあの町に行ったら、

牧師様の二人のお嬢様が気絶しちゃって。

ロレンス／…お二方は、どうされてますか。

オリーヴィア／…どう？

ロレンス／えーと、なんというお名前だったかな…フィリップと…

オリーヴィア／マチーヌ。

ロレンス／ああ、そうだそうだ。男の子が生まれていても、女の子ならなおさら、美しく成長されているでしょうね。

オリーヴィア／フィリップのお子さん？

ロレンス／ええ、いや、あの、マチーヌの。

オリーヴィア／ああ、マチーヌの。…そうね。男の子も女の子も…

ロレンス／ああ。両方いらっしやるんだ。

オリーヴィア／んん。三人ずつぐらいいたかしら。

ロレンス／そんなに――

オリーヴィア／どうしたの、ロレンス。

ロレンス／いえ、別に。

オリーヴィア／あなたも、フランスとロシアの遠征から帰国したあと、王妃につかえている侍女とご結婚されたんですってね。

ロレンス／（胸を張り）ええ。まあ。申し分のない妻です。

オリーヴィア／伯母さまがロレンスは立派な将軍になったって自慢気に話してくださいました。私も自慢の従兄弟だわ。

ロレンス／光栄です。

オリーヴィア／そういえば、伯母さまから聞いたことがあったわね。ロレンスは、何年も前に一夏ここで過ごしたら、人間が引き締まって見えるようになったって。

ロレンス／ああ……そんなこともありましたね。

オリーヴィア／そのときに、マチーナに何度か会ったせいかしら？

ロレンス／え……あ、そういうことはどうだったか……

オリーヴィア／そういうことはどうだったか？

ロレンス／オリーヴィア。

オリーヴィア／はい？

ロレンス／私は、訓練があつてこの近くを通つたのでちよつと立ち寄りただけなんです。もう行かなければ。

オリーヴィア／もう。

ロレンス／ええ。ご主人によろしく

オリーヴィア／亡くなったわ

ロレンス／え。……それは知りませんでした。

オリーヴィア／今は、息子と暮らしてるんだけど、去年息子が結婚して。

ロレンス／それは、よかった。

オリーヴィア／全然よくないのよ。息子の嫁が次々計画を立てて、私を旅行に行かせるわけ。家にいないように。

ロレンス／ほー。それは、伯母さまより手ごわそうですね。あ。迎える馬車がきたようです。では、お目にかかれてよかった。滞在中、伯母さまのよい話し合い手になってあげてください。（退場）

オリーヴィア／……ロレンスは賢いわね。こんな未開の土地からは、私も早く出発しないと。（退場。※室内に）

口日々の生活

町の女たち、集まって、噂立ち話。

ソフィーエ／昨日、うちの店にペトロレースが来たよ。

エッラ／ペトロレース？

マーヤ／放火女。

エッラ／ああ、バベットか。

ソフィーエ／ビーツとじゃがいもとフェンネルを買ってっただけど、知らないうちに二百クローネも値切られてね。二百よ、二百。

マーヤ／あ。きたよ

バベット／（買い物姿で急ぎ足で登場し、やや遠くから）おはよう。

一同／おはよう。

バベット／（ソフィーエに）昨日、私、払いすぎたわ。（退場）

一同／…

エッラ／払いすぎたって。

マーヤ／ソフィーエ。来週は三百値切るつもりだよ、あれは。

ソフィーエ／ああ。宣戦布告されたのか、今私は。

二組目、町の女たち、集まって、噂立ち話。

ノーラ／先週、バベットが港に来ただけどね。驚いたのなんのって。

鱈の舌をくれっていうのよ。

レーア／舌？

サーヤ／鱈の？

ノーラ／そう。冗談かと思ってる、そこに落とした頭がいっぱいあるよって言ったなら、本当に一匹ずつ吟味しながら舌を抜いてったのよ。

ソフィーエ／あ。きた。

バベット／（買い物姿で急ぎ足で登場し、やや遠くから）おはよう。

一同／おはよう。

バベット／（ノーラに）また、お願いね。（退場）

ノーラ／ああ。…（※思わずOKの返事）

ソフィーエ／舌を、いくらで売ったの？

ノーラ／お金はとらなかったよ。いくらにしているかわからないもの。

姉妹 テーブルで紙幣を数えている。

フィリップ／マチーヌ。数えた？

マチーヌ／ええ。どうしてこんなにお金が残ってるのかしら……

フィリップ／バベットよ。

マチーヌ／…そうね。

バベット／（声のみ）入っていいですか？

フィリップ／（慌ててお金を仕舞いながら）ええ。

マチーヌ／（慌ててお金を仕舞いながら）どうぞ。

バベット／（登場し）今日はもうやすみます。

マチーヌ／そう。

フィリップ／今日もごくろうさま。

マチーヌ／あ。バベット。

バベット／はい。

マチーヌ／たまには、少しお話でもしましょうか？

フィリップ／そうね、マチーヌ。いい考えだわ。

マチーヌ／まあ、座ってちょうだい。毎日よくしてくださって

フィリップ／私、紅茶をいれてくるわ。（立ち上がりかける）

バベット／私はいりません。（※座らない）

フィリップ／そう？…

マチーヌ／私たちね、バベット。ときどき、あなたの身の上について話

すことがあつて、

マチーヌ／あなたが、ご主人と息子さんを、その、鼠のように…

バベット／ああ。

マチーヌ／そんなおそろしい出来事を経験して、あなたは今もとてもつ

らい思いを一人で抱えているんじゃないかしら。

バベット／…

フィリップ／あ。まだ思い出したくないなら、また別の日でもいいのよ。

ただ、話すとお楽になることもあるから…

マチーヌ／そう。だから、いつでも私たちに話してもらえたらって思っているの。

バベット／話すことは別に。

マチーヌ／そう？

フィリップ／本当に？

バベット／人生。

フィリップ／…え？

バベット／人生だ。

フィリップ／…あ。

マチーヌ／人生。そうね。

バベット／おやすみなさい。(退場)

マチーヌ／…強い人ね。

フィリップ／やっぱり、ペトロレースだったんだわ。

三組目 町の女たち、集まって、噂立ち話。

ノーラ／ときどき、こわーい顔をして海を見てるのよ。

エツラ／バベットでしょ？

サーヤ／私も見たことある。

エツラ／仲間を待ってるんじゃない？

ノーラ／仲間？

エツラ／だから、海賊とか。

ノーラ／かいぞ

サーヤ／シツ！

バベット／(登場して)おはよう。

三人／おはよう。

バベット／教えてください。(籠？から四種類？のじゃがいもを一つず

つ取り出しながら)これは何？

エツラ／じゃがいもです。

バベット／これは？

エツラ／じゃがいもです。

バベット／これは？

エツラ／じゃがいもです。

サーヤ／種類を聞いてるんじゃない？

ノーラ／そうよエツラ。全部じゃがいもだつてことぐらい、見れば分かるじゃない。

バベット／そうです。種類。

ノーラ／ほら。種類ですよね。…えーと、これは、サーヤが作ってるじゃがいもじゃない？

サーヤ／うん。

ノーラ／これは、サーヤ。それからこれはマーヤが作ってるじゃがいもで、こっちはレーアのじゃがいもです。

バベット／……

エツラ／（じゃがいもを指しながら）サーヤ、マーヤ、レーア

バベット／ありがとう。（退場）

三人／……

四編目、町の女たち、集まって、噂立ち話。

ソフィーエ／今、あそこをバベットが走っていったよ。

マーヤ／あれはね、歩いてるらしいよ。

ソフィーエ／どうしていつもあんなに急いでるのかしら。

エツラ／いつも、急いで逃げてたんじゃない？

レーア／うん。

マーヤ／逃げてた？

ソフィーエ／ああ、きつとそうよ。それで、急ぐのが習慣になったのね。

バベット／（いつの間にか三人の後方にて）ミントがありますか？

三人／え！？

バベット／ミント。

ソフィーエ／ミント？ 何それ。

マーヤ／あ。うちにある鉢植えが、その、ミントかもしれません。

バベット／やっぱり。あの家ですね？

マーヤ／ええ。

バベット／オレガノとデイルもありますね？

マリーヤ／…

ソフィーエ／あるの？

マリーヤ／名前はわからないんですけど…いくつか鉢植えがあります。
船乗りのアイヴィンのお土産で。

バベット／少しほしいです。OK？

マリーヤ／ええ。

バベット／ありがとう。あとで取りにいきます。(退場)

三人／……

ソフィーエ／どうしてバベットは、あんたの家に鉢植えに詳しいの？

マリーヤ／わからない。…伸び放題になってるからかな。

五組目、町の女たち、姉妹の家の前で掃除するバベットを遠くに見ながら……

ノーラ／この間は、山のほうに行って、荷車にいっぱい薪を積んで帰ってきたのよ。

マリーヤ／あれはね、フリチョフんちの薪なんだって。

ノーラ／ああ、そうなの。フリチョフんちの

ソフィーエ／フリチョフが亡くなっただでしょ？ それで、バベットが家の片づけを手伝いにいって、もう使うこともないだろうからつてもらってきたらしい。

マリーヤ／はじめから薪が目当てだったんじゃない？

ノーラ／うん。私もそう思う。

ソフィーエ／あ。お二人が帰ってきた。

マチーヌとフリリッパ、慈善訪問から急ぎ足で帰ってくる。

玄関先で、働いているバベットに……

マチーヌ／バベット！

フリリッパ／ただいま、バベット。

マチーヌ／バベット。今日のスープはとっても飲みやすかったってアン
ドレアスが喜んでたわ。とろみがついてるのがよかったって。

フリリッパ／一度も咳こまなかったのよ

マチーヌ／さ、バベット、暗くならないうちに、ヘンリックとクヌートにもスープを届けたいから、温めてちょうだい。

マチーヌとフリリッパ、バベット、家の中に消える。

右の会話を聞いていた三名、退場しながら…

ノーラ／そういえば、スープを温めるのに、薪は必要ね。

ソフィーエ／私はね、フリチョフの家の薪は、バベットが持ち帰るのが正解だったって思ってる。

ノーラ／私もそう思ってた。

マーヤ／よかった。二人が私と同じ考えで。

マチーヌとフリリッパ、登場し、急ぎ足で次なる慈善訪問に向かいながら…

マチーヌ／今日もすっかり準備ができてたわね。

フリリッパ／ほんと。バベットって、なんて段どりがいいのかしら。

マチーヌとフリリッパ、退場。

ノーラとソフィーエ、登場。

ソフィーエ／船乗りのアイヴィンが、マーヤにプロポーズしたらしい。

ノーラ／え——（歩みが止まる）

ソフィーエ／（気づかず、歩き続けながら）私はサーヤから聞いたんだけどね。

バベット／（後方から追いついて？）私はマーヤから聞きました。断ったって。

ノーラ／え…

バベット／人生。（退場）

ノーラ／断ったんだ。…（追いかけている）ソフィーエ。マーヤはアイヴィンのプロポーズを断ったんだって。（走る）

オリーヴィア／（登場しており）でもね、ノーラ。あなたがアイヴィンと結婚できるっていう保証はまだどこにもないのよ。

ノーラ／オリヴィア！

オリヴィア／お久ぶり。

ノーラ／ええ…

オリヴィア／あなたの人生に、何も進展はないようね。

ノーラ／…

オリヴィア／私は再婚することになったのよ。伯母さまに報告にきが

てら、あの姉妹にも自慢しようと思つて。

ノーラ／…あ。おめでとつございます。

オリヴィア／じゃあ。(退場)

ノーラ／……

教会。町の女たち、集まっている。

ソフィーエ／オリヴィアがいる。

ノーラ／わかつてる。

エッラ／オリヴィアがいる。

ノーラ／わかつてる。

マチーナ／皆さん。おはようございます。

一同／おはようございます。

フィリップ／あ。オリヴィア。いらしていただいて嬉しいわ。

オリヴィア／どうも。

マチーナ／じゃあ皆さん。まず、いつもの讚美歌を歌いましょう。

フィリップ／レーア。オルガンをお願い。

オリヴィア／皆さんの人生に、何も進展はないようね。

一同／…

マチーナ／レーア。オルガンを

オリヴィア／皆さん。今日は皆さんにいいお知らせをってきました。

ソフィーエ／いいお知らせ？

ノーラ／再婚するんだって

オリヴィア／さきほど、マチーナとフィリップにはお話したんですけ

ど、私は、パリの郊外にある小じんまりしたお城に住むことになりました。皆さんの中に、もし、私のお城で働きたいという方がいたら、

喜んでお引き受けしようと思ってます。

一同／…

マチーヌ／フィリップ。

フィリップ／なあに、マチーヌ。

マチーヌ／今気がついたんだけど、オリーヴィアは、バベットを引き抜こうとしてるんじゃないかしら。

フィリップ／私も、それを心配していたところよ。

レーア／あもう。

マチーヌ／はい。

フィリップ／なあに、レーア。

レーア／弾いていいんでしょうか。

フィリップ／あ。

オリーヴィア／皆さん。詳しいことはマチーヌとフィリップに伝えてありますので、お返事をお待ちしています。レーア。邪魔をして悪かったわね。

マチーヌ／レーア。弾いてちょうだい。

オリーヴィア、去っていく。レーア、オルガンを弾こうとするが…

サーヤ／お城…

エツラ／お城では何をして働くんだろう

フィリップ／もし、バベットが行きたいと言ったら、私たちは止められないわ
マチーヌ／行きたいって言うかしら

ソフィーエ／お城って広いの？ フィリップ／言うと思うわ

ノーラ／そりゃあ広いでしょ。私たち三人の家を足したくらいはあるんじゃない。

マリーヤ／もつとでしょ。マチーヌ／そのときは、仕方ないのよ

サーヤ／窓拭きとかじゃない。百個くらいあるかも

エツラ／窓が百個？

ソフィーエ／百人住んでるの？

レーア／（オルガンをジャーッと鳴らす）

一同／…

レアー、オルガンを弾きはじめ、一同、讚美歌を歌う。

姉妹の家。一同テーブルを囲んでいる。

バベット、お茶とビスケットを運んでくる。

一同、ビスケットをいつものように食べる。

マチーヌ／庭園係、部屋係、厨房係。大きく分けて三つのお仕事に分か

れるそうよ。(※以下、マチーヌとフィリップはそれとなくバベットを観察)

一同／…

フィリップ／マーヤは庭園係に興味があるんじゃない？

マーヤ／え？

マチーヌ／そうね。マーヤのお庭には植物がいっぱい伸びているものね。

マーヤ／いいえ。興味はありません。

フィリップ／そう。…みんな、厨房係に興味がありそうね。

一同／…

フィリップ／実はね、オリヴィアは来月、お客様を大勢招いて趣向を凝らした夜会を開きたいんですって。

ソフィーエ・エツラ／（それぞれ）…ヤカイ…

フィリップ／「十七世紀風」って言ってたかしら。

マチーヌ／ええ。ここに「十七世紀風」のメニューを書いていったわ。

「去勢鳥 根菜添え。鳩のププトン。」

フィリップ／「詰め物をしたレタス・シモンヌ夫人風。衣をつけてグリ

エしたアトレット」

マチーヌ／「去勢鳥の胸肉のタルト。リ・ドウ・ヴオの串焼き・上等な

ラゲー添え」

フィリップ／「シャトーブリアン風タンバル。滝のスリユターヌ」

一同／…

マチーヌ／（批判を込めて）私とフィリップは、こういうお料理は、

フィリップ／マチーヌ。…それでね。今のメニューの中で、一つでも作

れそうだというものがあれば、厨房係として採用してくださるそうよ。

一同／…

マチーヌ／いいのよ。皆さんもこういうお料理を好ましく思わないこと

はよく知っています。

ノーラ／ええ、マチーヌお嬢さん、その通りです。オリーヴィアはただ私たちを羨ましがらせたいただけなんです。こういう見たことも聞いたこともないお料理を並べれば私たちが羨ましがると思っています。

フィリップ／ノーラは羨ましいの？

ノーラ／いいえ。……私たちの料理とそんなに変わらないと思うし。

ソフィーエ／そうなの！？

フィリップ／そうなの、ノーラ？

ノーラ／詰め物をしたレタスのシモンヌ夫人風というのは、シモンヌさんという少し太った方がいらして、何かを少し太めに詰めただけだと思います。

エツラ／へえ

ノーラ／たぶん。

フィリップ／去勢鳥が二皿もあるんだけど…？

ノーラ／あの…去勢しないほうがワイルドなんですけど、少し味ににじりが出るので、やっぱりしたほうがしっとりするんだと思います。

姉妹以外／へえ。

マチーヌ／ノーラ？

ノーラ／はい。

フィリップ／冷や汗をかいてるけど、大丈夫？

ノーラ／…はい。

マチーヌ／バベット。

バベット／はい。

マチーヌ／あなたは、オリーヴィアのお城で働くというお話に興味はあるのかしら？

バベット／いいえ。全く。

マチーヌ／全く？

バベット／ええ。

フィリップ／本当に？

バベット／本当です。

マチーヌ／そう。…あ、皆さんのお茶をさげてちょうだい。

バベット／はい。

フィリップ／（メニューを指しながら）こういうお料理に興味は？
バベット／全くありません。

マチーヌ／そうよね。

フィリップ／私たちもなのよ。

バベット／はい。

ソフィーエ／フランス人は、去勢鳥が好きなんですか？

バベット／はい？

ソフィーエ／二皿もあるから。

バベット／…質問の意味がわかりませんが、鶏は放っておくと殺し合いの喧嘩になりますから、食べる鶏はみんな去勢します。喧嘩をして傷がつかないように。

一同／…

フィリップ／そうなの。ワイルドなのね。

マチーヌ／そうね。今ね、ノーラから、ワイルドだって聞いてたところなの。ノーラ。だいたい当たってたじゃない。

ノーラ／…

玄関のノックの音。バベット、迎えるため退場。

フィリップ／オリーヴィアかしら。

オリーヴィア／（声のみ）こんにちは。

マチーヌ／そうね。

オリーヴィア／（登場）こんにちは。

一同／こんにちは。

オリーヴィア／（笑）そうじゃないかと思ったわ。

マチーヌ／え？

オリーヴィア／誰もこの町は出ないのね。顔を見ればわかるわ。

ノーラ／私は、いつかこの町を出てみたいと思っていますけれど、オリーヴィアのお城は遠慮しておきます。

オリーヴィア／そう。

ソフィーエ／じゃあ…

町の人々／（口ぐちに、あいづちをうち、立ち上がる）

フィリップ／皆さん、気をつけて。

マチーヌ／また、来週、教会で。

町の人々／（口々に）はい。さようなら（退場）

ノーラ／さようなら、オリーヴィア。（退場）

オリーヴィア／さようなら、ノーラ。（座る）

マチーヌ／…皆さんに聞いてみたんだけど…

オリーヴィア／ええ。

フィリップ／バベットにも聞いてみたんだけど

オリーヴィア／彼女は絶対にこないと思ったわ。

フィリップ／まあ

マチーヌ／どうして？

オリーヴィア／私の新しい主人はね、あの人の夫と息子を鼠のように撃ち殺した一派だから。

姉妹／（息を飲む）…

フィリップ／あの…伯母さまは喜んでくださったでしょ？ 再婚のお話を聞いて。

オリーヴィア／どうかしら。歳をとりすぎて表情があまり動かないのよ。フィリップ／きつと、喜んでいらつしやると思うわ。

オリーヴィア／どちらかといえば少し悲しげだったわ。

マチーヌ／悲しげ？

オリーヴィア／伯母は全部わかってるから。

マチーヌ／何を？

オリーヴィア／私が今針のむしろのような状態だったことを。

フィリップ／針のむしろ？

オリーヴィア／よそのものだから。

フィリップ／そうだと思ったのよ。

マチーヌ／だから、この町の誰かを一緒に連れていきたかったんでしょ？ あなたの期待に答えられなくて残念だったわ。

フィリップ／ねえ、今からでも、その再婚のお話を考え直すことはできないの？

オリーヴィア／針のむしろでも、ここより生甲斐があるわ。
姉妹／…

□多額の賞金

ソフィーエとノーラ、登場。歩きながら……

ソフィーエ／アンドレアスが亡くなって、何年になるだろうね。

ノーラ／うん。ヘンリクも危ないらしいね。

エツラ／（登場して）今、クヌートが亡くなった。

ノーラ／そう。

エツラ／明日、前夜式だって、伝えてくれる？

ソフィーエ／うん。わかった。

ノーラ／明日ね。（エツラ、退場）

ソフィーエ／でも、クヌートとヘンリクは長生きしたよね。95くらい

でしょう？ 大往生だ

ノーラ／ヘンリクはまだ生きてるよ。

ソフィーエ／まあ、そうだけど。やっぱり、アイヴィンは早すぎたね。

ノーラ／……

ソフィーエ／ノーラ、まだマーヤと口きいてないの？

ノーラ／うん。別に用事もないし。

ソフィーエ／マーヤに当たってもしょうがないと思うよ。

ノーラ／わかってる…

ソフィーエ／お葬式にいかないって決めたのはノーラなんだから。

ノーラ／うん

ソフィーエ／葬式の知らせが届いたのも、マーヤの家が一番港に近いか

ノーラ／わかってるって。

ソフィーエ／でもさ、聞こうと思ってたんだけど、どうしてアイヴィン

のお葬式に行かなかったの？ 船に乗って向こうの町に行くチャン

スだったのに。

ノーラ／…私はさ、ずっとこの町を出てみたいと思ってたわけなんだけ

ど、それは、まずアイヴィンの船に乗るっていうのが前提だったみた

いなね。

ソフィーエ／ふーん。

ノーラ／それで、船の旅のことは何百回も何千回も夢に見たけど、そこ

から先のことはあんまり想像もできないし

ノーラとソフィーエ、退場。

姉妹の部屋。マチーヌとフィリップが、出かける支度をしている。

マリーヤ登場。

フィリップ／あら、マリーヤ。

マチーヌ／どうしたの？

フィリップ／クヌートのことは聞いた？

マリーヤ／はい。あの、これ（※封書）、新しい船乗りの…

マチーヌ／キルステン？

マリーヤ／はい。キルステンが届けてくれました。バベットに郵便です。

フィリップ／バベットに？（受け取る）

マチーヌ／ありがとう。

マリーヤ／じゃあ、私も準備があるので。

フィリップ／ありがとう。（マリーヤ、退場）

マチーヌ／バベットに？

フィリップ／パリからだわ。…バベットに手紙がきたのは初めてよね。

マチーヌ／ええ、そうね。

姉妹退場。

ここまでに町の人々の讚美歌（クヌートの葬儀）が始まっている。

あるいは、ここで町の人々の讚美歌。

バベット、手紙を手に登場。窓の外？を見ながら立ち直し、考え込んでいる。

姉妹、登場。バベットの様子を、少し離れたところからじっと見ている。

フィリップ／あのパリからの手紙を受け取ってから、バベットはほとん

ど口を利かなくなったわね。

マチーヌ／ええ。頭がパリに行ってしまったのね。

フィリップ／それで、ときどき、フツて笑うでしょう？

マチーヌ／ええ。フツてね。

フィリップ／笑ったあとに、にらんだような目つきにならない？
マチーヌ／なるわ。でも、何をにらんでるのかはわからないのよ
フィリップ／ええ。バベットの目は、笑っていてもにらんでいても、い
つも遠いところを見ているみたい。

マチーヌ／そのとおりよ、フィリップ。私も同じことを感じていたわ。

バベット、姉妹の前を横切る。

姉妹／あ。バベット。(呼びかける)

バベット、答えず、そのまま退場。

フィリップ／私たちの声も聞こえなくなったみたい。

マチーヌ／ええ。彼女は今、パリの道を歩いているのね。

フィリップ／でも、パリの道は、バベットにとってつらい思い出しか
ないんじゃないかしら。

マチーヌ／フィリップ。きっとそんなことはないのよ。内戦の時代は思
い出したくないでしょうけれど、幸せな思い出もたくさんあるはずよ。
フィリップ／…そうね。ああ、彼女はやっぱりパリに戻りたいのね。…
あんなに頼もしいバベットがいなくなってしまったら、私たちはどう
なるのかしら。

マチーヌ／フィリップ。昔はバベットはいなかったのよ。

フィリップ／ええ。…そうね。昔に戻るだけね。

マチーヌ／フィリップ。

フィリップ／わかったわ、マチーヌ。昔に戻るだけ。そう思わないと。
マチーヌ／でも実は、私もあなた以上に心配なの。昔は私たちも若かつ
たもの。実際には、私たちは昔のように働けないわね。

フィリップ／……

フィリップ／それよりマチーヌ、今は楽しいことを考えましょう。

マチーヌ／そうね、いよいよ来月の十五日が、お父様の生誕百年の記念
日ね。

フィリップ／ええ。私はね、お父様が生きてらしたときに座ってらした

場所に椅子を置いて、まるでそこにお父様がいるようにして、みんな
で語らいたいなと思ってるの。

マチーヌ／…ちよっと待って。それ、うまくいくかしら
フィリップ／いかないかしら

マチーヌ／何かお父様に話しかけても、実際には何も返事はかえってこ
ないでしょう？

フィリップ／じゃあ、お隣の部屋にお父様がいることにして、みんな
語らうのはどう？

マチーヌ／お隣の部屋に？

フィリップ／ともかくお父様が生きていらっしやるようにして、記念日
をお祝いしたいのよ。

マチーヌ／それはわかるわフィリップ。とてもいい考えよ。

フィリップ／皆さんには、その日は夕飯も食べてもらいましょう。

スープとパン。いつもの食卓と同じでかまわないわね。あ。贅沢を
して、コーヒーをつけましょうか。

マチーヌ／そうね。いつものようにバベットに作ってもらいましょう。

姉妹／！……

マチーヌ／バベットは来月の十五日までこの町にいるかしら。

姉妹／……

ノーラとソフィーエ登場。歩きながら、あるいは町角で…

ノーラ／来月のお二人のお父様の生誕百年祭に、エツラは行かないって。

ソフィーエ／え！？ どうして？

ノーラ／レーアに会いたくないみたい。

ソフィーエ／ああ。

ノーラ／二人を仲直りさせようと思って、サーヤが間に入ったら、余計
にこじれちゃったみたいよ。

ソフィーエ／ノーラ。

ノーラ／うん？

ソフィーエ／あんたは行くでしょう？

ノーラ／マーヤとはあんまり会いたくないんだけど…

ソフィーエ／でも、生誕百年祭なんだから。
ノーラ／うん…

エッラ、マーヤ、登場。間もなくノーラ退場。

エッラ／レーアは、クヌートの家から、オルガンを持ってたんだよ。
マーヤ／知ってるよ。レーアのオルガンはずいぶん前から調子が悪くな
ってたからね。

エッラ／だけど、あのオルガンは私がもらう約束をしてたんだよ。
ソフィーエ／でもレーアは讚美歌の伴奏の練習をしないとならないん
だから。

エッラ／それだつて、あのオルガンは私がもらう約束してたのに。
ソフィーエ／でもね、エッラ。あんたは、オルガン弾けないでしょう。
エッラ／弾けなくても、クヌートは私にくれるって言ってたんだよ。
マーヤ／じゃあ、そういうふうにはレーアに言えはいいいじゃない。

エッラ／言えない。

マーヤ／どうして？

エッラ／オルガンが弾けないから。

三名、退場。

バベット、登場。

バベット／今、お話しても大丈夫ですか？

姉妹／バベット！

マチーヌ／ええ、もちろんよ。

フィリップ／私たち、あなたからお話があるんじゃないかと思って、今
か今かと待ってたの。

バベット／パリから手紙がきました。

姉妹／ええ。

バベット／フランスの富くじで、私の番号が出ました。

姉妹／……え？

バベット／フランスの富くじで、私の番号が出ました。

フィリップ／とみくじ？

バベット／はい。

マチーヌ／とみくじが当たったってことかしら？

バベット／はい。

姉妹／まあ！

バベット／一万フラン、当選しました。

フィリップ／一万フラン…

バベット／はい。

マチーヌ／そう…バベット、握手をしてもいいかしら。

バベット／はい。

マチーヌ／（握手をしながら）おめでどう、バベット。あなたは、握手

しなくていいの、フィリップ？

フィリップ／（握手をしながら）おめでどう、バベット。

マチーヌ／皆さんにもお知らせしないとね。

フィリップ／ええ。

マチーヌ／とてもいいニュースなもの。

フィリップ／ええ。

マチーヌ／私まで嬉しい気持ちよ。

フィリップ／ええ、私も、こんな不思議な気持ちになったのは生まれて

初めてかもしれないわ。とても高揚してふわふわした気分よ。

バベット／私から、お二人に、お願いがあります。

姉妹／…

フィリップ／何かしら。

バベット／お二人のお父様の生誕百年祭の祝宴のお料理を、全て私に任

せていただけないでしょうか。

フィリップ／…祝宴？

バベット／はい。

マチーヌ／私たちは、いつもの食卓に、コーヒーをつけようと思ってた

のよ。

フィリップ／ええ。私たちは、それで十分なの。

バベット／私に任せていただくことは、OKですか？

マチーヌ／え、ええ、

フィリップ／いつものお食事とコーヒーを

バベット／もう一つお願いがあります。

姉妹／…

バベット／本物のフランス料理のディナーを作らせてください。

マチーヌ／…でい？

バベット／ディナー。フランス料理の晩餐会にしたいんです。

姉妹／いけません。それはいけません。

バベット／マチーヌ。

マチーヌ／いけません

バベット／フィリップ。

フィリップ／それは許可するわけにはいかないわ、バベット

バベット／私がこちらにきてから、お二人に何かお願いをしたことがあ

ったでしょうか。

姉妹／…

バベット／お二人は毎日お祈りをされています。でも私はしていません。

なぜだかわかりますか。願い事が何もないからです。お祈りをしよう

にも、願い事が何一つないからです。それがどういうことか、想像し

てください。

姉妹／…

フィリップ／マチーヌ。想像できた？

マチーヌ／できないわ

フィリップ／祈ることが何もない、なんてことがあるのかしら…

バベット／それが今は、心からの願い事があるんです。お二人のお祈り

を神様が聞き入れてくださる喜びと同じ喜びをもって、私の初めての

お願いを聞き入れていただけないでしょうか。

姉妹／…

マチーヌ／ちよつと待ってねバベット。相談してくるわ。(フィリップ

を連れ、バベットから離れ) そういえば、これまでバベットから何か

頼まれたりお願いされたことは、一度もなかったわ。

フィリップ／ええ。それに、きつと、パリに戻るんでしょうから、最初

で最後のお願いな。

マチーヌ／…富くじに当たったんですものね。

フィリップ／そうね。一回のディナーくらい、どうってことないんでしょかね。

マチーヌ／一万フランよ。

フィリップ／積み上げたらどのくらいの高さになるか見当もつかないほどよ。

姉妹／（何度もうなずいて自分自身たちを納得させる）

マチーヌ／わかったわ、バベット。

フィリップ／あなたの好きなようにディナーをつくってちょうだい。

バベット／ありがとうございます！

姉妹／……（※不器用な笑顔）

バベット／では、準備のために二週間お休みをいただいてもいいでしょうか。

マチーヌ／え

フィリップ／二週間？

バベット／フランスに行つて材料を調達したいんです。

マチーヌ／…そう

フィリップ／材料を…

マチーヌ／いいわよね。

フィリップ／ええ。（※あいずち）

バベット／向こうで私の甥にいろいろ頼むつもりですが、ソフィーエも連れていっていいでしょうか。

フィリップ／ソフィーエを？

バベット／ええ。

マチーヌ／彼女がいいなら（姉妹でうなずき合う）

バベット／よかった。これから頼んできます。（退場）

姉妹／……（間もなく退場）

町の人々、（2か所に）登場しており…

マーヤ／聞いた？

レーア／うん。

サーヤ／聞いてない。何？

マール／ソフィーエがフランスに行くんだって。

サーヤ／ソフィーエが？ 知ってた？

レーア／うん。

エツラ／ソフィーエ。フランスに行くの

ソフィーエ／うん。

ノーラ／え？ フランス？

ソフィーエ／うん。バベットに頼まれたんだけど、断れなくて。

ノーラ／どうして？

エツラ／何しに行くの？

ソフィーエ／荷物を持ちたりしてほしって。

ノーラ／どうして断れなかったの？

エツラ／荷物を持つだけ？

ノーラ／本当は断りたかったの？

エツラ／ねえ、荷物を持つだけなの？

ノーラ／ねえ、どうして断れなかったの？

ソフィーエ／あのね。断っちゃいけないって思ったの。あんなに嬉しそ

うなバベットの顔を見たことがなかったから。

マール、サーヤ、レーアがノーラたちに近づいていく。

エツラ／あ。(会わないように、退場)

マール・サーヤ／(少し遠くから) ソフィーエ！

ノーラ／あ。(会わないように、退場)

サーヤ／いつ？

ソフィーエ／ん？

サーヤ／いつフランスに行くの？

マール／ねえ、行ってる間、ソフィーエのお店は閉じるの？

ソフィーエ／ああ。お店はレーアに頼んだ。

サーヤ／そうなの？

レーア／うん。

四名、右の会話をしながら、退場。

フォッツムのレーヴェンイェルム家の屋敷の一室。

ロレンス、登場。

ロレンス／ただいま、伯母さま！ 馬車の手配を済ませてきましたよ……（ドア越しに？）伯母さま？……おやすみになったんですね。……私が今回、あの町の牧師様の生誕百年祭に出席しようと思ったのは、たまごちらに逗留する期間と重なったからなのはもちろんですが、実は、牧師様の生誕百年をお祝いする気持ちからというより、自分のためなんですよ。私の中にいる若かりし自分を説得し、ギャフンと言わせるためです。「あのとき、あの町に留まり、貧しくとも慎ましく清らかに生きる道を選ぶべきだったのではないか？」……今もときどきそんなふうに私に話しかけてくる若かりし頃の私自身に、「どうだ、今の自分のほうが正しかっただろう」と知らしめてやりたいんです。（笑）

オリーヴィア／（登場して）楽しそうね、ロレンス。

ロレンス／オリーヴィア！

オリーヴィア／お久しぶり。

ロレンス／聞いてたんですか。

オリーヴィア／ええ。あなたが勝手に話し始めるから、仕方なく。

ロレンス／参ったな……伯母さまがおやすみになられているので、独りごとのつもりだったのですが。

オリーヴィア／伯母さまは起きてるわよ。

ロレンス／え。

オリーヴィア／へーってな顔をして、愉快そうに聞いてらしたわ。

ロレンス／人が悪いな。

オリーヴィア／ロレンス。私もあなたとほぼ同じよ。自分のために牧師様の生誕百年祭に出席することにしたの。ただ私は、あなたと違って、たくさん意地悪をしてこようと思ってるわ。

ロレンス／聞き捨てならないですね、意地悪というのは

オリーヴィア／だってね、雪道の中を馬車に揺られて何時間もかけて、わざわざ行くのよ。それであの人たちが出してくれるのはきつと、薄い紅茶と味のないスープと硬くなったビスケットよ。

ロレンス／ワインも出るんじゃないかな。私は何度かワインをこ馳走に

なつたことがありますから。

オリーヴィア／まあ、そう。ワインを。

ロレンス／ええ。

オリーヴィア／そのワインは、ワインの味がしたの？

ロレンス／…ええ、まあ、少し酸っぱい味がしました。保管の仕方をきつとご存じなかったんだと思います。

オリーヴィア／私はね、ロレンス。「はい、ワインです」って言われて

酸っぱいものを飲まされたら、意地悪な気持ちになるのよ。

ロレンス／（笑）そうですか。

オリーヴィア／面白い？

ロレンス／いや、そのくらいの意地悪なら心配する必要もなさそうだと思うって。

オリーヴィア／あら。私はまだ「意地悪な気持ちになる」って言っただけで、そのあとどんな意地悪をするかは話してないんだけど。

ロレンス／続きがあるんですか。

オリーヴィア／当たり前じゃないの。それから、あなたのおかげでもう一つ別な楽しみができて嬉しいわ。あなたの中にいるらしい、若かりしころのロレンスにいろいろ話しかけてみようと思ってるわ。

ロレンス／話しかける、というのは、例えば？

オリーヴィア／そうね、「今よ、ロレンス、さあ、マチーナをお庭に連れ出したら？」なんてけしかけるの

ロレンス／オリーヴィア。

オリーヴィア／（笑）そんなに動揺するとは思わなかったわ。あなたの中には本当に今も若かりしころのロレンスが住んでるのね。

ロレンス／ええ、そのようですね。でも、生誕百年の記念祭が終われば、彼はいなくなるはずですよ。

オリーヴィア／そう。

ロレンス／ええ。では、伯母さまにごあいさつしてきます。

オリーヴィア／私ももうやすむわ、ロレンス。おやすみなさい。

ロレンス／おやすみなさい、オリーヴィア。

オリーヴィア、ロレンス、それぞれ退場。

口亀とつずらと讚美歌

町の女、登場。船が到着したことを伝えて回る。

町の女たち、港に集まってくる。

下手前（暫定。下手奥か）からバベットの姿が現われる。

バベット／（船内に向かって）気をつけて、慎重に扱ってね。それはあとにして、手前ものから運び出しましょう。ああ、それはそんなふうに持たないで。（と言いながら、船内に消える）

マーヤ／やっぱり、しばらくフランスに帰ってたから、フランス語なまりが強くなってるね。

サーヤ／うん。フランス語かと思った。

バベット／（声のみ）気をつけて。

ソフィーエ／（荷物を抱えて登場しながら）はい。…バベット。これ、いったん下に置いてもいいですか？

バベット／（現われ）静かにね。こすれたりすると痛むから。

ソフィーエ／はい。こすれないように静かに…（と言いながら置く）

ノーラ／（かなり遠くから？）ソフィーエ。…

エッラ／ソフィーエ。…

ノーラ／ソフィーエ。

ソフィーエ／あ。…あとで。

バベット／ソフィーエ。

ソフィーエ／はい。（いったん退場）

ノーラ／あとで…

エッラ／ソフィーエは、フランスに行ったら私たちのことはどうでもよくなっちゃったのかな。

ノーラ／そんなことあるわけないじゃない。

エッラ／そうだよね。

「」まで、20羽ほどのつずらの鳴き声が、だんだん近づいてくる。

※台詞は中断されない。

サーヤ／何の音？

一同／…（耳をすます）

マーヤ／なんだろう……

バベットとソフィーエは一人ずつ、あるいは二人で、食材の入った箱を次々運びだしている。※荷台を使う場合は、荷台に積んでいく。

ソフィーエ／（うずらたちの入った箱を抱えて現われる）

バベット／傾けないで。並行に。

ソフィーエ／はい。傾けない。並行に。

サーヤ／…鳥？…

ソフィーエ／これはどこに？

バベット／（うずらたちに）あー、私の可愛い子ちゃんたち、元気にしてるかな？ 長旅で疲れてないかな？ 急がないとね。この寒さだと凍ってしまうかもしれない。

一同／……

ノーラ／「可愛い子ちゃん」…

ソフィーエ／バベット。あそこにノーラたちが。運ぶのを手伝ってもらいますか？

バベット／…そうね。

ソフィーエ／みんな。（あごで呼ぶ※両手はぶさがっているので）
マーヤ／呼ばれてる？

バベット／運ぶのを手伝って

ソフィーエ／（通訳的に）運ぶのを手伝ってくださいって

一同／…（それぞれに、不安気に近づいていく。以下受け取っていく）
バベット／心配しなくても大丈夫よ。この子たちは元気いっぱいだけど、まだ歩けないから、逃げ出すことはないわ。

一同／…

ソフィーエ／そんな心配な顔しなくても大丈夫だって言ってる。

バベット／レーアはこれを。カンタル・フルダンベール。サーヤは、重いけど、この氷を。マーヤはこれを。ラム酒とコニヤックも入ってるから、落とさないように気をつけて。みんなわかった？

ソフィーエ／みなさん、わかりましたか？

マーヤ・サーヤ／はい。

レーア／臭い。

バベット／カンタル・フルダンベルよ。

エツラ／かんとる・ふるだんべーる…？

ソフィーエ／チーズ。

レーア／（マーヤに）カビてる。

マーヤ／（確認し）ソフィーエ。これカビてる。

ソフィーエ／高貴な青カビらしい。

レーア・マーヤ／高貴な…？

ノーラ／あの、私は…

エツラ／！（息をのむ音）今、これ（※足元の大きな箱）動いた？

バベット／ノーラとエツラはここでしたらばらく荷物の番をお願い。一度で

は運びきれないから。

サーヤ／今私が蹴つちやったかも。（※動いて見えた大きな箱を）

エツラ／そっか。びっくりした。

ソフィーエ／二人には見張りをお願いしますって

ノーラ・エツラ／はい。

バベット／じゃあ、急ぎましょう。ソフィーエ、傾けないようにね。

ソフィーエ／はい。

バベット、マーヤ、サーヤ、レーア、バベット、ソフィーエが退場。

ソフィーエ／その箱は、中を見ちゃだめだよ。

ノーラ／どれ？

ソフィーエ／それ。絶対見ないようにね。

ノーラ・エツラ／うん

バベット／（戻ってきて）ソフィーエ。凍え死ぬでしょう！

ソフィーエ／はい。（急ぐ）

バベット／私は、冷凍うずらは使わないから。（退場）

ソフィーエ／はい。（退場）

エツラ／……食べるの？ 可愛い子ちゃんって呼んでたのに…

ノーラ／イソップ物語に出てきた魔女の話に似てない？
エツラ／魔女の話？

ノーラ／この箱には、樽が入ってるんじゃないかな。ビールかエールが入った樽。昔、イソップ物語で読んだんだけど、魔女が無尽蔵にビールが出てくる樽を持ってね、誰かがその樽をもらうんだけど、絶対に中を見てはいけなくて言われてたのに、中を見ちゃうわけ。そうしたら、樽から山ほどのカエルがピョンピョン飛び出してきた。っていう結末だった。

エツラ／…カエルがビールをつくってたの？

ノーラ／違うって。中を見ちゃったから、ビールがカエルに変わっちゃったの。もったいないことしたよね。

エツラ／ああ。……（見たい）

ノーラ／エツラ。まさか、中を見ようとはしてないよね？

エツラ／ノーラは見たくないの？

ノーラ／ソフィーエに言われたでしょう？ 絶対に見たらだめだって。

エツラ／……（見たい）

ノーラ／エツラ

エツラ／だって

ノーラ／私は見ない。ソフィーエに言われたんだから。（横を向く）

エツラ／……（見る）！（悲鳴）

ノーラ／エツラ。見たの？

エツラ／…どうしよう…ビールが、亀の化け物に…

ノーラ／え…だから見ちゃダメだって言ったのに。

暗転 もしくは、照明変化して転換。

姉妹の厨房。海亀の箱が置かれている。姉妹、厨房をのぞき見ている。

フィリップ／すごい量の荷物を運び入れてたわね。

マチーヌ／ええ。あのぴやーぴやー鳴いていた鳥たちは、どうして鳴き止んだのかしら。…

フィリップ／…どこにもぶら下がってないし、眠ってるんじゃない？
マチーヌ／そうね…

バベット／（登場して）お嬢さま。

姉妹／ああ、バベット。

バベット／ありがとうございます。おかげさまで、いい買い物できました。

マチーヌ／そう。

フィリップ／それはよかったわ。

マチーヌ／ワインも何本も買って来たようだけど…

フィリップ／ねえ。ソフィーエのお店にも売ってるのに。

マチーヌ／足りないようなら、船乗りのキルステンに頼めたでしょうし。

バベット／ワインと言えばワインですけど…

フィリップ／…ワインじゃないの？

バベット／クロ・ド・ヴージュの一九四六年ものです。

姉妹／……

マチーヌ／正確にはワインじゃなかったのね。

フィリップ／シャンパンだったのかしら。

バベット／シャンパンは、ヴーヴ・グリコの一九六十年物です。

姉妹／……

バベット／じゃあ、おやすみなさい。（退場）

姉妹／おやすみなさい。……

マチーヌ／何の音？

フィリップ／え？

マチーヌ／今、水がはねるような音がしなかった？ パシャッて。

フィリップ／そう？

マチーヌ／ほらまた。

フィリップ／……聞こえないわ。

マチーヌ／ちよつと見てくるわ。（厨房へ）

フィリップ／マチーヌ。やめておいたほうがいいんじゃない？（外で）

マチーヌ／…あら。大きな石。こんな大きな石。何に使うのかしら。

フィリップ／大きな石？

マチーヌ／ええ。緑がかった黒い石よ。（息をのむ）顔が出てきたわ。

フィリップ／え？ マチーヌ、何か言った？

マチーヌ／先に……フィリップには見せられない。

フィリップ／え？ なあに？

マチーヌ／先にやすんでちょうだい。私もすぐにやすむから。

フィリップ／わかったわ。じゃあまた明日。マチーヌ。いい夢を。(退場)

マチーヌ／ええ。…無理。いい夢は見無理。(退場)

教会。ソフィーエ以外の町の人々が集まっている。姉妹も加わる。

マチーヌ／皆さん。私たちは皆さんに謝らなければなりません。バベッ

トの願いを聞き入れたことが、私とフィリップの大きな過ちでした。

バベットは長年私たちに言葉では尽せぬほどよくしてくれました。で

すから彼女の願いをかなえてやりたいと思ったのです。でも、その願

いには、恐ろしい力を持つ大きな危険が関わっていたのです。(泣く)

フィリップ／マチーヌ。(※なぐさめと励ましも込めて)

マチーヌ／父の生誕百年の記念日に、皆さんが何を食べさせられ、飲まされるのか…

ノーラ／マチーヌお嬢様。

エツラ／私のせいなんです。

フィリップ／それは違うのよ、エツラ。

エツラ／違う？

フィリップ／ソフィーエに確認したわ。最初から、あれ、だったそうよ。

最初からあれだったと話したら、それはそれでこわがらせることになると思っ二人には話さないままにしてたんですって。

ノーラ／最初から…あれ…

エツラ／やっぱり魔女だったってこと？

マーヤ／あれってなに？

マチーヌ／マーヤ。聞かなくていいのよ。

マーヤ／どうしてですか。ノーラは最近いつも私に何も教えないし

フィリップ／マーヤ。教えない親切もあるのよ。

マチーヌ／とにかく皆さん。許してください。皆さんにこんな危険な目に合わせるようになってしまい…

サーヤ／お嬢様。

エツラ／ソフィーエは、もう危険な目にあつてるんですか？

ノーラ／あ！…そうなんですか？

マチーヌ／わからないわ。

ノーラ／ソフィーエが…

フィリップ／落ち着きましよう。まだ何かが起こったわけではないわ。

それに、ソフィーエは信心深いよい子です。

エツラ／はい。

マーヤ／私たちも、振り回されないようにすれば

サーヤ・レーア／うん。

ノーラ／何を食べさせられても、味がないように振る舞うのはどうでしょう。

エツラ／それがいいと思います。喜んだり驚いたりすると魔女の魔法に

かかってしまうかもしれないから。

サーヤ／ただ、黙々と食べればいいんでしょう？

ノーラ／そう。味は感じないようにして黙々と。

フィリップ／そうね。私たちの舌は、お祈りを捧げるために使いましう。

一同／はい。

マチーヌ／皆さんありがとう。じゃあ、いつものように、讃美歌を歌い
ましようか。

一同／はい。

レーア、オルガンを弾く。一同、讃美歌を歌う。

□晩餐会

右の讃美歌の中、別空間にソフィーエ登場。

支度を整えていく。※大きなテーブルクロスを幕のように持ち、その背後で。

バベットのテーマ曲に切り換わる。

バベット、登場。

手際の良いバベットの料理（ダンス）がスタート。

テーブルクロスがかけられ、またたく間にテーブルが整つ。

一同、登場。テーブルにつく。

※ナイフ・フォーク・グラスは実際にあることが好ましい。

ソフィーエ、ワインをついで回る。

マチーヌ／父の生誕百年に。(グラスを掲げる)

一同／(グラスを掲げる。町の人々は約束を目で確かめ合う)

町の人々、それぞれに「一気に」「あるいは」「一口」飲み、平然としてスープへ。

オリヴィア／私は遠慮しとくわ。(匂いをかいでしまわないように、グラスを鼻から遠ざけ、口にせずにテーブルに置く)

ロレンスは、おそろおそろ口にする。ハッと鼻に近づけ、ささ目に高さまで持ちあげた後、テーブルに置く。

ロレンス／なんてことだ。これは…アモンティラーダだ。しかも、今まで飲んだどのアモンティラーダよりうまい。(町の人々を見る)

町の人々／(普通にワインを飲み、またスープに向かう)

ロレンス／オリヴィア。このワインは今まで味わったことがないほどオリヴィア／酸っぱいんでしょう？ わかってるわよ

ロレンス／違うんだ。うまい

オリヴィア／あら、よかったわね。酸っぱくないワインもあったのね。

ロレンス／そうじゃなくて…(ソフィーエを呼び) このアモンティラーダはどこで手に入れたんだい？

ソフィーエ／あもんでいらーど

エッラ／ワインは全部ソフィーエの店にあります。

ロレンス／ワインが全部、君の店に？

ソフィーエ／ええ、まあ。この町でワインを扱ってるのはうちだけだから。

ロレンス／ワインが全部…このアモンテイラードも

エッラ／飲みたいときはソフィーエの店に買いにいけます。

ロレンス／皆さんも？

ノーラ／ええ。飲みたいときはいつでもね

ロレンス／信じれない。…おや。このスープは…

ノーラ／お嬢様。牧師様は、波の上を歩いて対岸の教会に行かれたことがありましたね。

一同／（口々に）ああ。あつたあつた。

ノーラ／嵐が続いて、船乗りは誰も船を出さなかったら、牧師様は「私は波の上を歩いてでも渡ります」って仰られて

ロレンス／（スープを口にし）なんてことだ！

フィリップ／本当なのよ、ロレンス。

マチヌ／ええ。父は、波の上を歩いて渡るって宣言したの。

ロレンス／いや、あの、このスープが

エッラ／それは無理だつて、誰もが思いましたよね。

町の人々／（それぞれに）ああ。思った思った。

オリヴィア／ロレンス。この町のスープについて教えておかなくて悪かったわ。

ロレンス／いや。オリヴィア。君は食べてないの

オリヴィア／当たり前よ。味が無いでしょう？

ノーラ／そうしたら、クリスマスの三日前に、

町の人々／三日前に

ノーラ／向こう岸まで一面の水が張って。

ロレンス／オリヴィア

フィリップ／お父様は歩いて向こう岸まで行かれたわ。

町の人々／（口々に）そうだったそうだった。波の上を歩かれた。

ロレンス／いいから、食べて。これは正真正銘、本物のそれも極上の…

…（町の人々を見る）

町の人々／…（黙々とスープを口に運ぶ）

ロレンス／なんてことだ。（ワインをつぎにきたソフィーエに）もしか

して、君たちは、このスープも珍しくないのかい？

ソフィーエ／ええ。スープは、毎日飲んですから。

ノーラ／ソフィーエ。あんたもここにきて、スープを飲みなよ。
ソフィーエ／私は、今日はいいよ。

ロレンス／今日はいい！？　こんな美味しいスープを、食べ飽きてるの
か！？

フィリップ／そんなこと言わないで、ソフィーエ、座って。
マチーヌ／そうよ、ソフィーエ。一緒にお話しましょう。

オリーヴィア／ロレンス。何をそんなに興奮してるの？

ロレンス／このスープは

オリーヴィア／私はね、パリで二番目に美味しいと言われているスープ
をよく飲んでるの。

ノーラ／クヌートは昔飲んだくれの暴れん坊だったね。

町の人々／そうだったそうだった。

エッラ／牧師様がクヌートを改心させたときのお説教を覚えてる？

ソフィーエ／もちろんだよ。「慈しみと真実は手を取り合い、正義と幸

福は口づけをするのです」

ノーラ／私には意味がわからないよ。

ソフィーエ／クヌートだってわかってやしなかったよ。

エッラ／でもクヌートはオルガン弾きになった。

ノーラ／そうだった。

ソフィーエ／そして、誰より信心深くなった。

ロレンス／オリーヴィア。早く。

オリーヴィア／わかったわよ。パリで二番のスープの香りと味と舌ざわ
りを思い出し、あれを想像しながら、これを飲むことにするわ。(飲
む)

ソフィーエ／慈しみと真実は手を取り合い、正義と幸福は口づけをする
のです。

オリーヴィア／なんてこと！

一同(口とオ以外)／慈しみと真実は手を取り合い、正義と幸福は口づ
けをするのです。

オリーヴィア／こんなスープが、どうしてここに！

マチーヌ／皆さん。乾杯しましょう。

一同？／乾杯！

ノーラ／子供のころ、きれいな色をした石が海から流れついたことがあっただろう？

エツラ／ああ

ソフィーエ／あったあった

ノーラ／誰かが、あの石に触ると幸せになれるって言ったんだ

ソフィーエ／うん

ノーラ／それで私は走った。きれいな色をした石に向かってね。途中までは一等賞だった。ところが何かにつまづいて転んだんだ。みんなが私を抜いていったよ。そしたら、マールヤが立ち止まってね、振り返って私のところまできて、手を差し伸べてくれたんだ。

エツラ／わかった！　じゃあ、ノーラは真実だ。

ノーラ／え？

ソフィーエ／ああ。マールヤが慈しみでノーラが真実か。

エツラ／慈しみと真実が手を取り合い、

ソフィーエ／正義と幸福は口づけをするのです。

フィリップ／皆さん。乾杯しましょう。

一同？／乾杯！

町の人々、平然と次の料理を食べ始める。

毎日同じような食事をしてきたように。

ロレンス／（その様子を見回した後、自分も口に運び）これは……ブリ

ニのデミノフ風だ！　みんな、驚かないのか？　この味に……

オリーヴィア／たしかに、見た目はよくできてるわね……（食べながら）

……私はね、ロレンス。パリで二番目に美味しいと言われるブリニの

デミノフ風を食べることが……ええっ！

ノーラ／明日は雪が降るだろうね。

ソフィーエ／うん。空気が澄むだろうね。

マチーヌ／お父様も雪が降る日を愛してらしたわ。

フィリップ／空気も心も澄んでいくからよ。

エツラ／クヌートは澄んだ心で私にオルガンをくれると言いました。でも、クヌートは目がよく見えなくなっていて、私をレーアだと思って

たんです。

幸せな空気が充満していく。

レーアがエツラに笑みを送り、ノーラとマーヤが乾杯をし、

マチーヌとロレンスが見つめ合い……

淡い色とりどりの花の絵が描かれた柔らかい大きな布が開かれ空中に広がる。

はじめに大きな一枚が。続いて人々がいろいろな二人一組となり、次々と色と

りどりの布を広げ、空中を充満させる。

バベット、登場し、その幸せな人々を、見渡している。

姉妹がたたずんでいる。

バベット、姉妹の視界の中へ。

姉妹／バベット！

フィリップ／今日は素晴らしいディナーだったわ。ありがとう。

マチーヌ／あなたがパリに帰っても、私たちは今日のディナーを忘れないでしよう。

バベット／パリには帰りませんけど。

フィリップ／え？ マチーヌ。今、パリには帰らないって聞こえたんだけど。

マチーヌ／私たちだけじゃなくて、見て、星も喜んでるわ。

バベット／お金もないし

マチーヌ／お金もない……（※方言をオウム返し）

フィリップ／なんてこと。全部使いきってしまったの？

マチーヌ／バベット。半分くらい残しておけばよかったのに。

バベット／そうね。

人々の永遠に続きつな幸せな空気。

完。